
B A B Y R O N 3

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B Y R O N 3

【Nコード】

N 2 5 4 8 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

感情が高ぶると『発熱』する力を持つ青年 貢と元SWAP（警視庁特別行動部隊）の浅井 啓警部。彼らの前にまた新たな『事件』が広がる・・・
その関連性は？

第一部のうちの第3話です。

3・2人(前書き)

はい、何とか4部で終わらせます(――¥)。。
長くなりそうなので今悩んでいる。。

3・2人

3・2人

貢の希望で、浅井 啓は千葉の海に来ていた。
夏の日差しが眩しい。潮風が2人の肩を叩いていく。

ざざざ・・・

あまり有名な観光名所でもなく、貢が、
「海に行こう。」

というから来てみただけだった。

啓も特にその方面に詳しい訳でもないから、文字通り『来てみた
だけ』。

波の音と、遥か遠くで釣りを楽しんでいる人たち、そんな風景で
ある。

ただ一つだけ彼らと違ったことと言えば、

「なあ、啓。」

貢が『その前』で立ち止まる。「これって、『腐女子』？」

「どこでそんな言葉覚えたの。」

啓はのんびりした口調で言い、『その前』にしゃがみこんだ。「

これは『腐乱死』っていうの。」

さっそく、調べ始める啓。

「ずいぶん、時間がたってるねー。あちこち魚に食べられてる。
ふやけてるしねー。」

「おえ。。吐きそう。」

貢は思わず顔をそむけ、「・・・今日、俺何にも食べらんない。」

「俺も。」

と、啓は調査を進める。下半身を覆っている青いビニールを取り、

『死因』を調べる。

「ちよつと、こつち向いてねー。」

動じた風もなく、遺体を半回転させ、「水死じゃないね。ここに」と、腰の辺りを指差し、「深い刺し傷が残ってる……たぶん、サバイバル・ナイフだろうね、傷口からすると。」

「警察呼んだ方がいいんじゃないの？」

確かに、啓も警察官だが。

遺体と啓に背を向けながら、貢は呟いた。

「そうだね。」

相変わらず浅井 啓警部はのんびりとした口調で答え、胸ポケットから携帯を取り出した。

ぎりぎりアンテナが2本立っている。

「あ、もしもし。」

啓は、「今、千葉の 海岸にいるんだけどね、ちよつと変死体見つけちゃったの……そう……そう、来てくれる？」

そして、携帯を切ると、腐乱死体に視線を戻し、

「変なもん見つけちゃったねー。」

「見つけたくて来たんじゃない、啓。『海だけ』見たかっただけ。」

「やはり事件ですか……！」

いきなり背後から女性の声が聞こえた。「浅井 啓警部一言！」
大阪 東灘区の『事件』で会った、某民放の女性キャスター 梅

宮だった。

車で来たらしく、海岸の路肩には青いバンが止められていた。

「なんで、ここにいるの。」

啓は振り返って尋ねた。「今、警察に知らせたところなのに。」

「番記者ですから。」

既にカメラマンは変死体を撮影し、梅宮の右手には銀色のマイクが握られていた。

「死因はなんですか？他殺ですか？自殺ですか？いつからあなた

方はここにいますか？」

「うるさいおばさんだなー。」

相変わらず死体には背を向けたまま、貢が呟く。

「・・・まだアラ2です。」

梅宮は目を細め、貢の背中を睨みつけた。

それから、再び、啓に視線を戻し、

「どうして、あなた方はいつも『事件の側』にいますか？」

「『いますか』って。」

浅井 啓は溜息を付き、「それ、こっちが聞きたい。あなたこそ何で俺たちの番記者なの？」

「あの、大阪の事件がきっかけです。」

梅宮は素直に答え、「あなた方は何者なんですか？」

「失礼だなあ。」

貢が答える。「納税者って答えれば、啓。」

「そうだねー。でも、その納税で俺、給料もらってるしねー。微妙なトコだね、貢。」

「・・・って、啓は税金払ってないの？」

「もちろん払ってるよ。」

啓は背後の貢に向かい、「でも結果的には、税金 給料 税金。グルグルお金がまわってるだけじゃん。」

ピーポー ピーポー

遠くからパトカーのサイレン音が聞こえて来た。

「そんなことより、浅井警部！」

梅宮は啓にマイクを近づけ、「税金より、この変死体について詳しい情報を。」

「それは」

数台のパトカーから降りて来た千葉県警の警官たちが近づいてくるのを視線で促し、

「あつちに聞いてくれる？俺、所轄外だから。」

「大阪だつて所轄外だつたでしょ？」

「あれは、貢が『本場物のお好み焼きとたこ焼きが食べたい』つていうから連れてつただけ。」

「やはり、事件を呼ぶ人たちなんですね、あなた方は。」

「決めつけないでくれる？」

ちらつと、貢は梅宮キャスターを睨みつけ、「映画の題名じゃないんだから。」

「下がって、下がって！」

そこで、千葉県警の警官によつて、報道規制がしかれた。

ある夏の出来事である。

3・2人（後書き）

長編にはしたくないので何とか4話で一応の1部を終わらせたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548m/>

B A B Y R O N 3

2010年10月14日15時10分発行